

ヘーゲルにおける法、道德、人倫

—Bruno Liebrucks の所説に即して—

小 林 正 士

序節 はじめに

第一節 ヘーゲルの法の理念—現存在と概念との一体性—

第二節 ヘーゲル『法哲学』の出発点としての意志論

—意志（自由）の「概念」に即して—

第三節 ヘーゲル『法哲学』における意志論

—意志（自由）の「現存在」に即して—

第四節 市民法学の観点からの Bruno Liebrucks の所説の検討・評価

序節 はじめに

本稿は、Bruno Liebrucks の「ヘーゲルにおける法、道德、人倫⁽¹⁾」の論稿を検討するものである。リーブルックスは、この論稿において、ヘーゲル法哲学における「自由」に関して論じている。リーブルックスは、「人間の自由は、ヘーゲル哲学の唯一のテーマであるということが出来る」(Ebd.,S.13.)と述べている。また、彼によれば、ヘーゲル「法哲学は、抽象的な自由を立てるのではなく、人間の『現実』の自由を求めるものである」(Ebd.,S.13.)と述べている。そして、彼は、ヘーゲルが法哲学において論じる自由は、法、道德、そしてそれを包摂する人倫の共同体の中で、現実化していると考えている。リーブルックスは、その論稿の中で、自由が、法、道德、人倫の中で展開する道筋を、明らかにし、これを総論的に示している。このようないわば、「自由と法の実現」というテーマは、現代の法哲学的観点からも検討していかなければならない重要な課題の一つであろう。そこで、本稿では、まず、リーブルックスが指摘する、ヘーゲル法哲学のテーマである自由とは、如何

なるものなのか、そして、それが展開する道筋を明らかにしていきたい。次に、そのリーブルックスの見解を、「市民法学」の観点から、検討・評価することにする。では以下、リーブルックスの見解を考察していくことにする。

第一節 ヘーゲルの法の理念—現存在と概念との一体性—

まずおさえておかなければならないのは、ヘーゲルの「法の理念 (die Idee des Rechts)」である。なぜなら、ヘーゲルが「法の理念」というとき、それは、ヘーゲル独特の意義を有するからである。ヘーゲルは、『法哲学』緒論の第一節の中で、法の理念に関して、次のように述べている。即ち、「哲學的法學が対象とするのは、法の理念であり、したがって、法の概念と、これの実現である⁽²⁾」。さらに、第一節追加において、次のように述べている。「現存在と概念、肉体とたましい—この一体性が理念である。それは調和であるばかりではなく、完全な相互浸透である⁽³⁾」。

ここでは、二つのことが読みとれるだろう。一つは、法の「現存在」が、人間の肉体に例えられ、法の「概念」が、人間のたましいに例えられているということである。そして、二つ目には、その「現存在」と「概念」との一体性が、「法の理念」であるということである。一般的には、「理念」という時、存在 (Sein) という意味というよりは、当為 (Sollen) という意味で理解されることが多いだろう。しかし、ヘーゲルが理念という時、概念と共に、Sein としての「現存在」という意味も有しており、これを理解しておくことが重要である⁽⁴⁾。この点に関して、ヘーゲルは、次のように述べている。

即ち、「法の理念は自由であって、それは真に把握されるためには、その概念においてと、そしてこの概念の現存在において、認識されなくてはならない⁽⁵⁾」。

ここで、ヘーゲルが、法の理念は、「自由」であると述べていることが、重要なことであろう。まさに、これが、リーブルックスが指摘するように、ヘーゲル法哲学のテーマが、「自由」であると言われる所以であるからである。

このように、法の理念は、その現存在と概念との一体性・相互浸透として

理解されるのである。そして、その現存在と概念との一体性としての法の理念とは、「自由」であることが示されている。従って、ヘーゲルの「法の理念」であるところの「自由」を考察するには、「現存在」としての自由の側面と、「概念」としての自由の側面を、⁽⁶⁾ 観ていかなければならない。以下、これを観ていく。

第二節 ヘーゲル『法哲学』の出発点としての意志論 —意志（自由）の「概念」に即して—

ここでは、「概念」としての自由の側面を観ていきたい。そもそも、ヘーゲル法哲学の出発点は、如何なるものなのだろうか。

この点、ヘーゲルは『法哲学』緒論の第四節で、次のように述べている。即ち、「法の地盤は総じて精神的なものであって、そのもっと精確な場所と開始点は意志である。これは自由な意志である。したがって自由が法の実体と規定をなす。そして法の体系は、実現された自由の王国であり、精神自身から生み出された、第二の自然としての、精神の世界である」⁽⁷⁾。

このようにヘーゲルは、法哲学の出発点に、「自由な意志」をすえている。では、法の地盤としての「自由な意志」の内実とは、如何なるものなのだろうか。ヘーゲルの意志論を、意志の「概念」の側面に即して、観ていきたい。

ヘーゲルによれば、意志には三つの要素が存在する。この点、ヘーゲル『法哲学』緒論の第五節では、次のように述べている。

即ち、「意志は〔 α 〕自我のまったくなんともきめられていない純粋な無規定性、すなわち、ひたすらおのれのなかへ折れ返る純粋な自己反省、という要素をふくむ」。「つまり意志は、いっさいを度外視する絶対的な抽象ないし絶対的な普遍性という、無制限な無限性であり、自己自身の純粋な思惟である」⁽⁸⁾。

さらに述べれば、「私がどんな規定のうちに自分を見いだそうと、あるいは私が自分のうちにどんな規定を定立しようとして、その規定を度外視するという、この絶対的な可能性、いいかえれば、どんな内容もなにか制限で

あるとする、いっさいの内容からの逃避⁽⁹⁾」である。つまり、端的に言えば、意志の純粹無規定な自我の側面である。ヘーゲルは、これを、意志の普遍性の要素と呼んでいる。

意志の第二の要素は、ヘーゲルが意志の特殊性の要素と呼んでいるものである。ヘーゲルは、これに関して次のように述べている。即ち、「 $[\beta]$ 自我はまた、区別なき無規定性から区別立てへの移行であり、規定することへの、そして、ある規定されたあり方を内容と対象として定立することへの移行である⁽¹⁰⁾」。リーブルックスは、この第二の要素を、「意志の内側における具体化」、「何かを意志する」(Ebd.,S.30.) ことであるとしている。

そして、第三の要素は、ヘーゲルが個別性と呼ぶものである。それは、第一の要素である普遍性と第二の要素である特殊性との、一体性としての個別性である。現実の意志は、従って、第三の個別性として存在している。それは、ヘーゲルによれば、次のようなものである。

即ち、「 $[\gamma]$ 意志は、この $[\alpha]$ と $[\beta]$ の両契機の一体性である。すなわち、特殊性がそれ自身のなかへ折れ返り、このことによって普遍性へと取り戻されたあり方、つまり個別性である。いいかえれば、それは、自我が自分を、自己自身の否定的なものとして、つまり規定され制限されたものとして定立しながら、同時に、依然として自分のもとに、つまり自分との同一性と普遍性のうちにありつづけ、したがって、規定のなかで自分をただ自分自身とのみつなぎ合わせるといふ、自我の自己規定である⁽¹¹⁾」。

ヘーゲルによれば、この意志の第一の要素と第二の要素との一体性としての第三のものを、「自由の具体的な概念 (der konkrete Begriff der Freiheit)⁽¹²⁾」であると規定している。即ち、「第三に、自我は、自分の制限、つまり右にいった他のもののうちにありながら、しかも自分自身のもとにある。自我は自分を規定しながら、しかもなお依然として自分のもとにありつづけ、普遍的なものを固持することをやめない。これが自由の具体的な概念である⁽¹³⁾」。

何かを意志するということは、必然的に他のもの、対象物、他者と関わらざるをえない。しかし、そのことによって、自由な意志は、本質的には制限

されるものではなく、むしろ、自由なあり方を具体的に実現できるというヘーゲルの認識が背後に控えているのである。従って、ヘーゲルは、これを、自由の具体的な概念としているわけである。つまり、具体的⁽¹⁴⁾というのは、他者との関係性における意志、即ち、個人的意志であると同時に、社会的意志であり、共同的な意志という意味である。さらに、そのことによって、真に意志は自由を実現するという意味で、具体的なものなのである。

このような意志の一般性と特殊性の一体性としての個別性は、確かに、以上に観てきたように、抽象的な理論ではあるだろう。しかし、ヘーゲルは、これを具体的な例をあげて説明している。それは以下のものである。

即ち、「われわれは、このような自由をすでに、感じの形式において、たとえば友情とか愛においてもっている。友情や愛においては、われわれは一面的に自分のうちにあるのではなく、他のものへの関係においてすすんで自分を制限し、だがこの制限するなかで自分を自己自身として知る。規定されているのに、人間は自分が規定されているとは思わないのだ。かえって、他のものを他のものと見なすことによって、そこにはじめて自己感情をもつのである⁽¹⁵⁾」。

私たちは、友情や愛において、このような自由を、実感として理解できるのではないだろうか。友人関係が存在し、愛の関係が存在し、それに苦しみ悩むこともあるにもかかわらず、しかし、それに喜びを感じ、そうした関係を持ち続けているということが、何よりの証左であろう。

このように、自由な意志とは、他者との関係性における自己規定であり、それは個別的なものであると同時に、社会的、共同的なものである。そして、「ここに」、人間の具体的な自由の概念が存在するのである。この点、リーブルックスは、次のように述べている。

「『自由な』人間の意志は、あらゆる社会的存在のつながりの中でのみ、存在する（so ist menschliche Wille frei nur innerhalb der Bezüglichkeit zu allen gesellschaftlichen Wesen）」（Ebd., S. 32.）。また、「人間の自由は、独りで、それ自体の存在ではなく、まずもって、社会的関係における意志の帰

還である」(Ebd., S. 34.)。従って、人間の自由は、「多様性の中の異なるものの相互承認」(Ebd., S. 35.)である。

以上のように、意志の三つの要素の論述から、法の理念としての自由な意志の「概念」について観てきた。ヘーゲルにおいて、自由は即ち意志であるし、意志は即ち自由であると考えられているのである。そして、その自由な意志とは、個別的なものであると同時に、社会的なもの、共同的なものとして考えられているのである。では次に、自由な意志が、個別的なものであると同時に、社会的、共同的なものとしてあるということの意義を、意志(自由)の「現存在」の側面に即して、観ていきたい。

第三節 ヘーゲル『法哲学』における意志論 —意志(自由)の「現存在」に即して—

リーブルックスは、ヘーゲル『法哲学』緒論の第8節を紹介している。ヘーゲルは、第8節で、次のように述べている。即ち、「[a] その規定されていることが、主観的なものと外面的直接的な現存在としての客観的なものと、形式的な対立であるかぎりでは、この規定された意志は自己意識としての形式的な意志であり、外の世界を自分の前に見いだす。そしてこの規定された意志は、その規定されたあり方のなかで自分のなかへ帰ってゆく個別性としては、活動となんらかの手段とを媒介にして、主観的な目的を客観性へ移しかえる (den subjektiven Zweck durch die Vermittlung der Tätigkeit und eines Mittels in die *Objektivität* zu übersetzen) 過程である⁽¹⁶⁾」。

ここで、注目したいのは、個別性としての意志は、「活動となんらかの手段とを媒介にして、主観的な目的を客観性へ移しかえる過程である」と述べている個所である。ここから分かるように、意志には、「主観性の側面」と「客観性の側面」があるということである。このことを理解することは、重要である⁽¹⁷⁾。

リーブルックスは、意志の「主観性の側面」に関して、次のように述べている。即ち、「意志は、常に、主観性の近代的意味において、主観性として

の人間の意志でのみ存在しうるのである」(Ebd., S. 43.)。では、ここでいう、意志が、「主観性の近代的意味において」とあるとは、如何なる意味なのだろうか。

それは、リーブルックスが指摘するように、「プロテスタントの原理 (das protestantische Prinzip)」(Ebd., S. 21.) であり、「近代世界の原理」(Ebd., S. 21.) と呼ばれるものである。つまり、「内面的自律・自由の原理」、別言すれば、「主体性の原理」と言ってもよいであろう。そして、リーブルックスは、このプロテスタントの原理、同じことだが、主体性の原理、「その後ろに残される哲学は、あり得ないのである」(Ebd., S. 21-22.) という。リーブルックスは、このように、この「プロテスタントの原理」の意義の重要性を強調している。

意志は、このように主観性の側面を有するが、しかし、同時に、「客観性の側面」も有するのである。即ち、リーブルックスによれば、「意志は、社会的制度において、客観的現存在を持ちうる」(Ebd., S. 43.) のである。そして、重要なのは、リーブルックスが指摘するように、「主観性から、社会的制度に自由を持っていく (die Freiheit aus der Subjektivität in die Institution hinüberträgt)」(Ebd., S. 44.) ということである。なぜなら、ヘーゲルが指摘するように、「われわれにとって自由と意志 (意志即ち自由—引用者注) は、主観的なものと客観的なものとの一体性だからである (denn Freiheit und Wille sind uns Einheit des Subjektiven und Objektiven)⁽¹⁸⁾」。つまり、主観性の自由は、「内面的自律・自由の原理」として、重要な意義を有するのだが、さらに踏み込んで、その主観性の自由を、内面の世界だけでなく、同時に、客観的な世界へと展開させていくということである。そのことによって、自由な意志は、「現存在」としての自由な意志たり得るのである。

そしてここで、リーブルックスは、ヘーゲル『法哲学』緒論の第29節を紹介している。即ち、そこでヘーゲルは、「およそ現存在が、自由な意志の現存在であるということ、これが法ないし権利である⁽¹⁹⁾」。つまり、ここでは、法における、自由な意志の「現存在」の側面が述べられている。この点、リーブルックスは、「外の世界に見いださない意志は、意志ではなく、妄想」

(Ebd., S. 43.) なのであると述べている。⁽²⁰⁾さらに、リーブルックスは、次のように述べている。即ち、「確かに、意志は、世界の中の個人として登場する。しかし、法が、人間の胸の内の主観的現存在 (subjektives Dasein) だけではなく、社会的制度としての客観的現存在 (objectives Dasein als Institution) でもあるというとき、はじめて個人は、人格 (Person) なのである」(Ebd., S. 44.)。つまり、人格というとき、人間の意志の自由の主観的側面と客観的側面の一体性として、はじめて、それが法の理念として、現実⁽²¹⁾に存在するものであるということである。

ところで、このように諸個人の意志が、現実化されるということが諸個人に意識され自覚されるようになったのは、歴史的には「近代」に入ってからのことであるとヘーゲルは考えている。とりわけ重要な歴史的な出来事は、「フランス革命」である。ヘーゲルは、『歴史哲学講義』の中で、次のように述べている。即ち、「太陽が天空にあって惑星がそのまわりをまわるようになって以来、人間が頭で、つまり思想でたち、思想にしたがって現実をきずきあげるといったことはなかった。ヌース (知性) が世界を支配する、と最初にいったのはアナクサゴラスだったが、いまはじめて人類は、思想が精神的現実を支配すべきだと認識するにいたったのです。ここには、まさしく、⁽²²⁾かがやかしい日の出がある」。この点に関して、リッターは、政治的自由の要求がフランス革命を通して提起した問題は、次の点にあると述べている。即ち、「自由の法形式を発見すること、つまり自己存在の自由にふさわしく、この自由を正当に評価し、個人が個人として自己自身であり、自分の人間としての使命を達成できる可能性を生み出す法秩序を作り出すことである」⁽²³⁾。

このように、自由な意志は、主観性の自由から客観性の自由へ、即ち、社会的な制度へと展開していくのである。社会的な制度とは、まさに、現実の「法制度」であり、「国家制度」である。これが、「現存在」としての意志 (自由) の側面である。

以上のように、ヘーゲル法哲学のテーマは、「自由」であるが、それは、ヘーゲルの「法の理念」が、自由であるからである。そして、自由なものは、

人間の意志であると考えられている。さらに、この法の理念としての自由(意志)は、「概念」としての側面と、「現存在」としての側面の一体性・完全な相互浸透であった。「概念」としての側面は、人間の「たましい」に例えられ、それは、意志というものが、個別的にあると同時に、社会的、共同的なものであるということである。これが、「たましい」としての「自由の具体的概念」である。他方、「現存在」としての側面は、人間の「肉体」に例えられ、それは、自由な意志というものが、主観的に自由であると同時に、これを、客観的な制度、即ち、社会制度の中で実現するということである。そして、このたましいと肉体、概念と現存在、即ち、人間の具体的自由の概念と社会的制度との、一体性・完全な相互浸透というものが、ヘーゲルが述べる「法の理念」である。この社会的な制度と一体になった法の理念の具体的な展開の叙述が、ヘーゲル『法哲学』においてなされているのである。⁽²⁴⁾従って、リーブルックスはこう述べている。ヘーゲル法哲学における、「人間の自由の展開は、法、道徳、人倫としての『法』の理論である (Die Entfaltung der menschlichen Freiheit ist die Lehre vom *Recht* als Recht, Moralität und Sittlichkeit)」(Ebd., S. 16.)。

このように、リーブルックスは、その論稿において、ヘーゲル『法哲学』の展開の道筋を論じている。では次に、このリーブルックスの見解を、市民法学の観点から、評価・検討していくことにしたい。

第四節 市民法学の観点からの Bruno Liebrucks の 所説の検討・評価

前述のリーブルックスによって示されたように、ヘーゲル『法哲学』は、「自由」というものが主題となっている。そして、ヘーゲルは、法の理念が、「自由」であると述べている。そして、その法の理念は、自由の概念と現存在との一体性・相互浸透である。法のたましいとしての自由の「概念」は、諸個人の自由な意志が、出発点となる。その自由な意志は、個別的なものであると同時に、社会的、共同的な意志である。他方、法の肉体としての「現存在」

も、出発点は、諸個人の自由な意志である。その自由な意志は、内面的自律を有しているとともに、それを客観的な制度、法制度、国家制度の中で実現されるものである。⁽²⁵⁾従って、法の理念としての「自由」の内実は、このような概念と現存在との一体性・相互浸透として理解される。⁽²⁶⁾以上のような、リーブルックスによるヘーゲル『法哲学』の理解は、「市民法学」の観点から、どのように評価できるだろうか。「市民法原理」およびこれを基礎とした「市民法学における市民」像の観点から、以下これを検討・評価していきたい。

市民法学において「自由」は、次のように位置づけられている。「市民法原理」のなかに、はっきりとあるように、『自由』という言葉は、市民法学にとって、きわめて重要なのである。⁽²⁷⁾ここに示されるように、市民法学にとっても、ヘーゲル『法哲学』と同様に、「自由」という語に枢要な意義が与えられている。そして、「市民法原理」とは何かといえ、それは二つある。「自由、平等、独立の諸個人の確立」と、「そうした自由な諸個人による友愛的、連帯的な国家共同体の形成」⁽²⁸⁾である。これは、言い換えれば、諸個人の主体性の原理と共同性の原理との調和であり、両者を実現していくということである。そして、この二つの原理に対応して、市民法学における市民像も二つある。一つは、「国家に対抗する市民」像、もう一つが、「国家に忠誠を誓う市民」⁽²⁹⁾像である。従って、市民法学における市民像は、この両面を有するものであると考えられているのである。

では、このような「市民法原理」およびこれを基礎とした「市民法学における市民」像を踏まえた上で、先のリーブルックスの見解を覗いていきたい。

まず、「概念」としての自由の側面では、「自由」というものが、個別的なものであると同時に、社会的、共同的なものとして理解されている。このように簡単に述べられるが、この意義は重要である。即ち、自由とは、他者からの自由というように、他者との関係を遮断する、あるいはこれを避けるというような消極的な自由という意味だけではなく、「他者への自由」という積極的な自由としても理解されなければならない。そして、この積極的な側面が重要なのである。なぜなら、自由というものを、個別的なものとしての

み理解するということは、他者、法、国家というものが、自らの自由と対立するもの、制限するものとして現れるからである。従って、例えば、国家による法の支配は、諸個人の自由の制限以外の何ものでもないという理解につながる可能性を孕んでいるのである。このような「自由」に対する認識・理解は、市民法学が強調する「自由」ではない。もちろん、こう述べたからといって、市民法学は、個別的な自由というものを、否定するという立場でもない。というのは、この個別的な自由は、国家との関係でいえば、「国家からの自由」として、近代法が獲得した基本的人権の原理的尊重に資するものだからである。このことは、「市民法原理」では、一つ目の「自由、平等、独立の諸個人の確立」によって基礎づけられ、「市民法学における市民」像では、「国家に対抗する市民」像によって基礎づけられ得るものである。

こうしたことから、市民法学のいう「自由」とは、個別的な自由とともに、共同的な自由という契機も重視するのである。即ち、自由とは、共同的なもの、他者との関係の中での「自由」をいうのである。それ故に、諸個人の自由は、他者、法、国家とは対立するものとは考えないのである。つまり、そこでの自由は、「国家による法の支配における自由」であり、「法律に従う自由」であり、「国家共同体の義務に従う自由」である。これはまさに、「国家を、みずからの外側ではなく、内側に存在するもの」として、「社会や国家のすべての目的は個人の目的でもある」⁽³³⁾ものとして受け入れるものである。そしてこれらは、「市民法原理」では、二つ目の「自由な諸個人による友愛的、連帯的な国家共同体の形成」の原理によって基礎づけられるものであり、「市民法学における市民」像からは、「国家に忠誠を誓う市民」像によって基礎づけられ得るものである。以上が、諸個人と国家共同体との一体化・相互浸透の論理である。

以上の自由に関する認識は、まさに市民法学における「自由」を理解するうえで、要であり、たましいであると言えるだろう。そして、それが、先の「市民法原理」および「市民法学における市民」像に反映されているのである。そうした観点から言えば、リーブルックスが指摘していた、ヘーゲルにおけ

る法の理念としての「自由」概念に対する理解は、重要なものとして評価されなければならないだろう。⁽³⁴⁾

では、「現存在」としての自由の側面は、どうであろうか。

「現存在」としての自由の出発点は、諸個人の自由な意志である。この点、リーブルックスは、ヘーゲルに即して、意志の自由は、まず主観的なものとして実現されるものであることを論じていた。そして、この意志の主観的な自由という側面を、「近代世界の原理」であるものとして、その重要性を強調している。これは、諸個人の内面的自律の重要性を強調するものである。これは、言い換えれば、「主体性の原理」というものであり、「市民法原理」でいえば、一つ目、即ち「自由、平等、独立の諸個人の確立」によって、「市民法学における市民」像によっては、「国家に対抗する市民」像から基礎づけられ得るものである。

さらに、自由な意志は、主観的な世界だけに留まるものではない。即ち、リーブルックスが指摘するように、「主観性から、社会的制度に自由を持っていく (die Freiheit aus der Subjektivität in die Institution hinüberträgt)」(Ebd., S. 44.) のである。そして、自由を、社会的な法制度の中で実現することが、具体的な自由の実現につながるのである。別言すれば、これは諸個人が有している主体性の自由の原理を、国家共同体の中で、法制度の中で実現していく⁽³⁵⁾ということを示しているのである。この見解は、まさに市民法原理と結びつくものである。市民法原理とは、繰り返して言えば、「自由、平等、独立の諸個人の確立」と、「そうした自由な諸個人による友愛的、連帯的な国家共同体の形成」⁽³⁶⁾であるからである。この点に関して、例えば、ピピンが指摘するように、ヘーゲルは、「ひとはたった一人では現実的には自由ではありえず、現実的な社会的諸制度の参加者としてのみ自由でありうる」⁽³⁷⁾と考えている。別言すれば、「公共体への参加」ということが、諸個人の現実的な自由に資するものであるということである。そして、この「公共体への参加」という考えは、「市民法学における市民」像の「国家に忠誠を誓う市民」像と結びつき得るものなのである。このような観点から言えば、リーブルック

スが指摘していた、ヘーゲルにおける自由の「現存在」に対する理解も、正
 当に評価されなければならないだろう。

以上のように、市民法学の観点から、リーブルックスが論じたヘーゲル『法
 哲学』における「自由」は、肯定的に評価されるものであると考える。それ
 はまた同時に、市民法学とヘーゲル『法哲学』とが内在的に結びついている
 ものであることをも示すものである。ヘーゲルは、法の理念は「自由」であ
 ると考えている。そして、その自由は、「概念」としての側面と、「現存在」
 としての側面との一体性・相互浸透であることを述べていた。即ち、それは、
 私たちの意志と、法制度との一体化・相互浸透として、法の理念としての自
 由を「実現化」することへ導くことを説くものである。法の担い手とは、私
 たち一人ひとりでしかない。ヘーゲルは、私たち一人ひとりが、「普遍的な
 るものを考え、普遍的なものを意志するものであるということによってこそ、
 法は現存在を得る」⁽³⁸⁾と考えている。従って、重要なことは、『「自分たちの意
 志をある普遍的な目的に向ける」』と同時に、『この目的を自覚しつつ』行為
 するということ⁽³⁹⁾である。ヘーゲルの言葉でいえば、「みずから了承し同意
 してこの普遍的なものを承認し、しかもおのれ自身の実体的精神（私たち自
 身の自由を支えるものとしての法制度—引用者注）として承認し、そしてお
 のれの究極目的としてのこの普遍的なもののためにはたらく」⁽⁴⁰⁾ということだ
 る。このような本稿での考察は、「自由と法」の実現ということを考える際、
 有益な考えの一つになり得るものであろう。

(1) Bruno Liebrucks, Recht, Moralität, und Sittlichkeit bei Hegel. in.: *Materialien zu Hegels Rechtsphilosophie, Band 2*, Hrsg. von Manfred Riedel, Frankfurt a. M. 1975, S. 13-51. 以下引用は本文中に記す。

(2) G. W. F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts, Werke*, 7, Frankfurt a. M. 1970, § 1, S. 29. ヘーゲル（藤野渉／赤沢正敏訳）『法の哲学Ⅰ』43頁（中央公論新社、2001）。

(3) Ebd., § 1 Zusatz. S. 30. 藤野／赤沢訳・前掲注（2）44頁。

(4) R・B・ピピン（星野勉監訳）『ヘーゲルの実践哲学 人倫としての理性的行為者性』171頁（法政大学出版局、2013）。ピピンによれば、「ヘーゲルは、理念をその現実化

- における概念、すなわち、その現実化と一体の概念と理解している」とある。
- (5) Ebd., § 1 Zusatz, S. 30. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 45頁。なお、同書45頁では、Daseinという語に関して、訳者注では次のように解説されている。「これはヘーゲルの定義では、『規定された存在ないし有』だから『定在』とか『定有』と訳されるのがふつうであるが、daは『そこに、現に』であって、『定』の意味はない」。
- (6) ピピン・前掲注(4) 165頁。ピピンは、『『法・権利の理念は自由である』がゆえに、私たちは、自由の概念とその現実化や現実性との両方を理解しなければならず、そうすることによっていかにして概念がこうした現実性を『それ自身に与える』のかを理解しなければならない』と述べている。
- (7) Ebd., § 4, S. 46. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 65頁。
- (8) Ebd., § 5, S. 49. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 72頁。
- (9) Ebd., § 5, S. 50. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 73頁。
- (10) Ebd., § 6, S. 52. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 76頁。
- (11) Ebd., § 7, S. 54. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 81頁。
- (12) Ebd., § 7 Zusatz, S. 57. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 83頁。
- (13) Ebd., § 7 Zusatz, S. 57. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 83頁。
- (14) G. W. F. Hegel, *Jenaer Schriften, Werke*, 2, Frankfurt a. M., 1970, S. 82. ヘーゲル(戸田洋樹訳)『フィヒテとシェリングの差異』86頁(公論社、1980)。若きヘーゲルの次の言葉は、よく知られているものである。「したがって、人格と他の人格との共同体は、本質的には(フィヒテにおけるような)個人の真の自由の制限としてではなく、個人の自由を拡大するものとみなさなければならない(Die Gemeinschaft der Person mit anderen muss daher wesentlich nicht als eine Beschränkung der wahren Freiheit des Individuums, sondern als eine Erweiterung derselben angesehen werden)」。ヘーゲル(村上恭一訳)『ヘーゲル初期哲学論集』136-137頁参照(平凡社ライブラリー、2013)。ピピン・前掲注(4) 366頁。ピピンは、次のように述べている。即ち、「本源的な依存関係を認め、その見地から行為することが、真の自立、真の『自己実現』、あるいは『現実化された』『具体的』自由を達成するための必要条件なのである(ヘーゲルは概して、このような自由を人間の最高の善、人間であることの実現と呼んでいる)」。「他者が自由でない限りは、正しくは私が自由(『現実的に』自由でかつ自己規定的な行為者)であると言うことはできないということであり、私の自由は他者の自由依存するということ、自由は相互的であるということである」。
- (15) Ebd., § 7 Zusatz, S. 57. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 83頁。
- (16) Ebd., § 8, S. 57-58. 藤野／赤沢訳・前掲注(2) 85頁。なお、藤野渉氏の訳では、übersetzenが、「翻訳する」と訳されていたが、ここでは、「移しかえる」と訳した。
- (17) 滝口清栄「Entfremdungと啓蒙精神—伝統的価値秩序の解体、あるいは着手点」滝口清栄／合澤清編『ヘーゲル現代思想の起点』201頁(社会評論社、2008)。滝口氏は、(注)の中で、「意志は、個別的意志と客観的意志の両面をそなえてこそ理性的意志だ」

ということを示している。

- (18) Ebd., § 8 Zusatz, S. 59. 藤野／赤沢訳・前掲注（2）86－87頁。
- (19) Ebd., § 29, S. 80. 藤野／赤沢訳・前掲注（2）122頁。
- (20) G. W. F. ヘーゲル（尼寺義弘訳）『法の哲学』第四回講義録—1821／22年 冬学期、ベルリン—キール手稿』13頁（晃洋書房、2009）。ヘーゲルは、以下のように述べている。即ち、「法が単なる表象であるとすれば、法は単に主観的なものである。我々が法を思考する限りは、法は概念である、しかし法は直接に自己において実在性を持っている。意志は主観性を不完全性と見ている、意志は主観性を満足させようと努力する。概念はそれの現実化において理念である」。
- (21) ディーター・ヘンリッヒ編（中村浩爾／牧野広義／形野清貴／田中幸世訳）『ヘーゲル法哲学講義録 1819／20』28頁（法律文化社、2002）。例えば、ヘーゲルは、次のように述べている。即ち、「奴隷制度の擁護者は皆、奴隷にされた者は自分自身では自由ではないということを論拠とします」。しかし、「人間が現実には自由であるかどうか、それはお互いに、一瞥しただけでは分かりません。自由なものとして承認されるためには、私は私の現存在（社会的制度としての客観的現存在—引用者注）においても自由であることを示さなければなりません」。「何人をも奴隷にしてはならないということは、法的な要請ではなくて、道徳的な要請です。法的な要求は、ただ自由が現存在（社会的制度としての客観的現存在—引用者注）において示される時にのみ自由にかかわるのであって、自由の現存在（社会的制度としての客観的現存在—引用者注）が示されないところではそうではありません」。
- (22) G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, Werke*12, Frankfurt a. M. 1970, S. 529. ヘーゲル（長谷川宏訳）『歴史哲学講義（下）』359頁（岩波文庫、1994）。
- (23) リッター（出口純夫訳）『ヘーゲルとフランス革命』30－31頁（理想社、1966）。
- (24) 桜井弘木「ヘーゲルとホッブズにおける国家と自由」宮本富士雄編著『ヘーゲルと現代』200頁参照（理想社、1974）。この点、桜井氏は、次のように述べている。即ち、「特殊性と普遍性との統一としての“自由の法形式”それこそ法概念の現存在として、法の理念（die Idee）である。そしてそれは同時に自由の理念でもある。このような法の理念を明らかにすることが、『法の哲学』の課題であったのである」。
- (25) Ebd., § 257, S. 398. ヘーゲル（藤野／赤沢訳）『法の哲学Ⅱ』216頁（中央公論新社、2001）。例えば、ヘーゲルは、国家について、以下のように述べている。国家は、「個々人の自己意識、彼の知と活動において媒介されたかたちで顕現するが、他方、個々人の自己意識もまた、心術を通じて彼の実体的自由を、彼の本質であるとともに彼の活動の目的と所産であるところの国家のうちにもっている」。また、桜井弘木「ヘーゲルとホッブズにおける国家と自由」宮本富士雄編著『ヘーゲルと現代』188頁参照（理想社、1974）。松村健吾『ヘーゲルのイェナ時代 生活編』165頁（文化書房博文社、2012）。松村氏は、ヘーゲルが考える「自己意識」に関して、以下のように述べている。

即ち、「自己意識は単なる個別的な意識ではなく、普遍性＝類の意識であり、普遍性の中での自己の位置の意識である。自己意識は類という普遍性から自己内へ押し戻されて、空虚な『私は私である』という形式に支えられて成立する意識であるが、それは類の意識であり且つ個の意識であるだけではなく、この類に属する全ての者に共有されている形式なのである。全ての人間が自己意識を持つのである。だから自己意識は、それ自身自己意識である無数の他者に取り囲まれて生きている」。

- (26) 小林靖昌「道徳性と人倫」日本倫理学会 金子武蔵編『ヘーゲル』42-43頁（以分社、1980）。小林氏は、以下のように述べている。即ち、「ヘーゲルにとって、法ないし社会制度一般は客観的精神として本来的には自由の現存在という意味を有している。つまり法とか社会制度が社会的正義を実現し、秩序を維持し、各個人の権利と自由を保障し、それぞれの固有の意志に基づく自由な活動をより広汎に可能にするかぎり、それらは現存する世界となった自由の概念なのである」。「他方、かかる人倫的存在は、各個人の、自由を自己の本性として自覚した主体的活動によって初めて、それ自身自由の概念の現存する世界として保持されるのである」。
- (27) 篠原敏雄「市民法学の哲学的基礎—市民社会論と自由の実現—」原島重義先生 傘寿記念論文集『市民法学の歴史的・思想的展開』52頁（信山社、2006）。
- (28) 篠原敏雄「沼田稲次郎『労働法論序説—労働法原理の論理的構造—』を読む—市民法学の視座から—」横井芳弘／篠原敏雄／辻村昌昭編『市民社会の変容と労働法』4頁（信山社、2005）。
- (29) 篠原敏雄「清水市民法学の継承と発展—『マルクス主義市民法学』でもなく『近代主義市民法学』でもなく—」広渡清吾・浅倉むつ子・今村与一編『日本社会と市民法学 清水誠先生追悼論集』88頁参照（日本評論社、2013）。篠原敏雄「市民法学における『市民』と『市民社会』の基礎法学的考察—ルソー、カント、ヘーゲルの思想との関連で—」東京大学社会科学研究所編 社会科学研究 特集：市民社会論の法学的射程 63-64頁参照。第60巻5・6号（東京大学社会科学研究所、2009）。篠原敏雄「市民法学における「市民」をどう捉えるか—「マルクス主義市民法学」でもなく「近代主義市民法学」でもなく」法学新報（中央大学）382-399頁参照 第115巻9・10号（2009）。
- (30) 篠原「市民法学における「市民」と「市民社会」の基礎法学的考察—ルソー、カント、ヘーゲルの思想との関連で—」前掲注（29）61頁。篠原氏は、次のように述べている。即ち、「個人の『主体性の原理』とこの自由（個人の自由—引用者注）は、法（法律）という『共同存在性』と対立するものではない。対立する、と考えると、法律は自由を制限するもの、となってしまう。そうではなく、個人の自由は、法律、法秩序、国家秩序、を介することによって、一層豊かな自由となるのである。この意味で、個人の自由は、法律、法秩序、国家秩序に根ざす自由とならなければならないのである」。
- (31) 西修『憲法改正の論点』23頁および191頁（文春新書、2013）。西氏は、次のように述べている。「戦後憲法学の『国家』観は、国家＝悪、国民＝善とみなし、国家は

国民の権利を抑圧するものであり、国家権力から国民の権利を保護することに憲法の意義を求めようとする。たしかに、かつての絶対君主制の時代には、そういう側面があった。しかし、今日の代表民主主義のもとでは、国家と国民とを対立関係で捉えるべきではない。それぞれの国民が、それぞれの立場でいかなる国家を作り上げていくべきかを考えていかなければならない」。「国家と国民を対立関係にあるとみるのではなく、国家と国民は、多少の緊張関係をはらみながらも、よりよき『この国のかたち』をつくることを目標に、ともに力を合わせて行動する協同関係にあるとみるべきである」。

(32) 西・前掲注 (31) 23頁。

(33) G. W. F. Hegel Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse 1830 Dritter Teil Die Philosophie des Geistes Mit den mundlichen Zusätzen ヘーゲル（長谷川宏訳）『ヘーゲル 精神哲学 哲学の集大成・要綱 第三部』328頁（作品社、2006）。

(34) 松村健吾『革命と宗教 初期ヘーゲル論考』240頁（近代文芸社、2007）。松村氏は、次のように述べている。即ち、「私的生活を投げうって祖国のために尽くす共和主義者（「国家に忠誠を誓う市民」像に対応—引用者注）と、個人の生存を保障する共同体としての国家（「国家に対抗する市民」像に対応—引用者注）がヘーゲル国家理論のエートスである」。

(35) 篠原敏雄『市民法学の基礎理論—理論法学の軌跡—』238—239頁（勁草書房、1995）。篠原氏は、次のように述べている。即ち、「人間の有するこの二つの契機（主体性の原理と共同性の原理の契機—引用者注）を、市民法体系を含めた実際の様々な制度（政治、教育等）を通じて、目に見える形にしていくことが、現代の重要な課題となるのである」。

(36) 篠原・前掲注 (28) 4頁。

(37) ピピン・前掲注 (4) 165頁。

(38) ディーター・ヘンリッヒ・前掲注 (21) 117頁。

(39) ピピン・前掲注 (4) 423頁。

(40) Ebd., § 260, S. 406 - 407. 藤野／赤沢訳・前掲注 (25) 234頁。

[参考文献]

G. W. F. Hegel, *Jenaer Schriften, Werke*, 2, Frankfurt a. M., 1970.

G. W. F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts, Werke*, 7, Frankfurt a. M. 1970. ヘーゲル（藤野渉／赤沢正敏訳）『法の哲学 I II』（中央公論新社、2001）。

G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, Werke* 12, Frankfurt a. M. 1970. ヘーゲル（長谷川宏訳）『歴史哲学講義（上）（下）』（岩波文庫、1994）。

G. W. F. Hegel, *Philosophie des Rechts nach der Vorlesungsnachschrift* K. G. v. Griesheims 1824/25. herausge. v. K. -H. Ilting. 長谷川宏訳『法哲学講義』（作品社、2000）。

- G. W. F. Hegel Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse 1830
Dritter Teil Die Philosophie des Geistes Mit den mündlichen Zusätzen ヘーゲル (長谷川宏訳)『ヘーゲル 精神哲学 哲学の集大成・要綱 第三部』(作品社、2006)。
- G. W. F. ヘーゲル (尼寺義弘訳)『「法の哲学」第四回講義録—1821 / 22年 冬学期、ベルリン—キール手稿』(晃洋書房、2009)。
- 小林正士「市民法学の論理とヘーゲル『法の哲学』」国士館法研論集 第10号 (2009)。
- 小林正士「市民法学における社会認識のための一考察」国士館法研論集 第11号 (2010)。
- 小林正士「ヘーゲルの社会哲学と市民法原理」国士館法研論集 第12号 (2011)。
- 小林正士「ヘーゲルの社会理論と市民法原理」国士館法研論集 第13号 (2012)。
- 小林正士「ヘーゲル法哲学の構造と市民法学」国士館法研論集 第14号 (2013)。
- 篠原敏雄『市民法学の基礎理論—理論法学の軌跡—』(勁草書房、1995)。
- 篠原敏雄『市民法学の可能性—自由の実現とヘーゲル、マルクス—』(勁草書房、2003)。
- 篠原敏雄「沼田稲次郎『労働法論序説—労働法原理の論理的構造—』を読む—市民法学の視座から—」横井芳弘・篠原敏雄・辻村昌昭編『市民社会の変容と労働法』(信山社、2005)。
- 篠原敏雄「市民法学の法哲学的基礎—市民社会論と自由の実現—」原島重義先生傘寿記念論文集『市民法学の歴史的・思想的展開』(信山社、2006)。
- 篠原敏雄「市民法学における「市民」と「市民社会」の基礎法学的考察:ルソー、カント、ヘーゲルの思想との関連で」東京大学社会科学研究所編 社会科学研究所 特集:市民社会論の法学的射程 (東京大学社会科学研究所、2009)。
- 篠原敏雄「市民法学における「市民」をどう捉えるか—「マルクス主義市民法学」でもなく「近代主義市民法学」でもなく」法学新報 (中央大学) 第115巻9・10号 (2009)。
- 篠原敏雄「ワークショップ概要 ヘーゲルと現代社会—法・国家・市民社会—」日本法哲学会編 法哲学年報 (2011) (有斐閣、2012)。
- 篠原敏雄「清水市民法学の継承と発展—『マルクス主義市民法学』でもなく『近代主義市民法学』でもなく—」広渡清吾・浅倉むつ子・今村与一編『日本社会と市民法学 清水誠先生追悼論集』(日本評論社、2013)。
- 滝口清栄／合澤清編『ヘーゲル現代思想の起点』(社会評論社、2008)。
- ディーター・ヘンリッヒ編 (中村浩爾／牧野広義／形野清貴／田中幸世訳)『ヘーゲル 法哲学講義録 1819 / 20』(法律文化社、2002)。
- 西修『憲法改正の論点』(文春新書、2013)。
- 日本倫理学会 金子武蔵編『ヘーゲル』(以分社、1980)。
- Bruno Liebrucks, Recht, Moralität, und Sittlichkeit bei Hegel.in.: *Materialien zu Hegels Rechtsphilosophie, Band2*, Hrsg. von Manfred Riedel, Frankfurt a. M. 1975.
- ヘーゲル (戸田洋樹訳)『フィヒテとシュリングの差異』(公論社、1980)。
- ヘーゲル (村上恭一訳)『ヘーゲル初期哲学論集』(平凡社ライブラリー、2013)。
- 松村健吾『革命と宗教 初期ヘーゲル論考』(近代文芸社、2007)。

松村健吾『ヘーゲルのイエナ時代 生活編』（文化書房博文社、2012）。

宮本富士雄編著『ヘーゲルと現代』（理想社、1974）。

リッター（出口純夫訳）『ヘーゲルとフランス革命』（理想社、1966）。

R・B・ピピン（星野勉監訳）『ヘーゲルの実践哲学 人倫としての理性的行為者性』（法政大学出版局、2013）。